

望ましい読み手像をめざした国語科指導内容の組織化

— 小・中・高校の関連に着目して —

前田 真証

はじめに

新「学習指導要領」（小・中学校は平成一〇年一二月、高校は平成一一年三月）が示され、『解説』も出そろって、通して読んでみた時、「国語」に関しては、以下のようなとまどいが出てこよう。

(1) 総括目標に「伝え合う力を高める」ことが加わったり、二学年単位（中学一年のみは一学年単位）で言語活動本位に学年目標が示されるようになったりしたもの、なおいろいろの要素を掲げたにとどまり、小学校・中学校・高等学校の卒業時点でのような話し手・聞き手・書き手・読み手を育てようとしているかが、実在性をもって浮かび上がってこないこと。

(2) 同じ「読むこと」の内容にしても、下記のように、小学校と中学校とは観点が組違い、どう系統的に組織化をは

かればよいか考えあぐねてしまうこと。

小 学 校	中 学 校
<ul style="list-style-type: none"> ① 読書的な読むことに関する指導事項 ② 叙述内容に即した読むことに関する指導事項(○) ③ 想像的な読むことに関する指導事項 ④ 事象と感想、意見にかかわる読むことに関する指導事項(○) ⑤ 目的的な読むことに関する指導事項(○) ⑥ 声を出して読むことに関する指導事項 	<ul style="list-style-type: none"> ① 語句の意味や用法についての指導事項 ② 内容把握や要約についての指導事項(○) ③ 構成や展開についての指導事項(○) ④ 表現の仕方についての指導事項 ⑤ 主題や要旨と意見についての指導事項 ⑥ ものの見方や考え方にについての指導事項 ⑦ 情報の活用についての指導事項(○)

(3)「読むこと」の中でも、系統化しやすい説明的文章を主にしている（前ページの○印のように）ため、文学的文章の読みについてはどのように体系だてようとしているかが判然としないこと。

そこで、「学習指導要領」に記された学年目標を、改めてどんな読み手を育てたいために挙げたものなのか問い直し、最も整合性のある観点を採用して、何としても小学校から高等学校まで指導内容を一貫して積み上げられるものにし、説明・論説ばかりか、文学的文章についても指導内容を顕在化するようにした。その肉づけに際しては最大限解説を生かすように努めたが、一貫性を妨げるばあいは保留し、私の方で補うこととした。

なお、小学校の指導内容については、下記の二編に具体化を試みているが、今回中学・高等学校まで射程に入れるため、改めて検討し、修正して加えることにする。

○「望ましい学習者の姿を明確にした説明的文章指導の構想——小学校を中心にして——」『教育実践研究』第八号、福岡教育大学附属教育実践総合センター、平成二二年三月三十一日、一〇九ページ

○「望ましい学習者の姿を見据えた文学的文章指導の構想——新『学習指導要領』の検討を中心にして——」『学習創造国語科——国語の力を生かす力に高める学習活動の展開——』福岡教育大学・附属福岡小学校、平成二二年四月

発行、一〇三～一一四ページ

一 説明・論説の読みの指導において

望ましい読み手像を二年単位に想定する時、

①「学習指導要領」の読むことの目標はどういう読み手を育てようとして掲げられたものかを推察したが、
②それが明確な児童・生徒の生きた姿を結ばないばあいは、芦田恵之助が明治四二年に綴り方教授を通して育てたいとした左記の姿を念頭に置いて、説明・論説のばあいはと考え直し、その発展線上に中学・高校の姿を描くこととした。

尋一・二……これが作文を書くということなのだ
と体験的に自覚できる児童に

尋三・四……思いきり書き広げ、書き尽くして、書くことに対して自信が持てる児童に

尋五・六……目的・効果を考えて文章を練り上げることに喜びを見いだす児童に

この立言が、一人の子どもがどのように作文の書き手として生い育っていくのが望ましいかを、最も明瞭な姿で打ち出したものだと考えられるからである。

また、内容においては

③説明・論説という観点から「学習指導要領」の『解説』を見直し、以下の四系列によって組織化を図ることとした。
すなわち、

説明・論説の読書の系列

説明・論説の内容理解深化の系列

説明・論説の読みの自覚化・評価の系列

説明・論説の学習法の系列

である。この領域独自の観点になっているかどうかの吟味は、なおこれからのである。

④実際に作成してみると、「学習指導要領」の「内容」には、小学五・六年と中学一年、中学二・三年と国語総合に、幾分重複が見られ、望ましい読み手像の設定にも、指導すべき内容の組織化にも、困難が生じた。できるだけ弁別するように努めたが、なお不十分である。

それにしても、小学校、中学校、高等学校という三つの

サイクルがあり、それが螺旋状に進められているという見通しが得られたのは収穫であった。

⑤空白の箇所は、「学習指導要領」には対応する内容が華がっていないものである。ただし、空欄のままでよいかどうかは改めて考え直してみなければなるまい。今回は、保留しておく。

⑥小学校の「学習指導要領」から導き出した観点で中学校以降も配列したため、「内容理解深化の系列」に何項目も集中してしまう羽目に陥った。これは、中学校以降の国語の読みの学習の特長とも言えようが、中学校の「内容」を基準にとれば、また別の系列化ができるかもしれない。

望ましい学習者の姿					
小学一・二年	小学三・四年	小学五・六年	中学一年	中学二・三年	国語総合
④説明的文章を読むのはこんなにおもしろいことだと気づく児童(読書において)……文章全体を通して	④論理的に書かれた文章を自分で次々に読破して自信をつける児童(読書において)……文章全体を通して	④説明・論説を読んだで思考を広げたり深めたりする喜びに目ざめ、知的発見のために、あるいは課題解決のために、自己省察のために、生産的に読んでいこうとする児童(読書において)……文章レベル	④説明・論説に対するこれまでの思いを見つめ直し、自らの関心や課題の枠をぐんと拡大するために読書に打ち込むようにする生徒(読書において)……文章レベル	④説明・論説を読む目的・意図を明確に自覚して、読書したことが実際の社会生活に役立つように努め、読書を生活の切り拓き、自己を育てる契機にしようとする生徒(読書において)……文章レベル	④説明・論説を、日本の言語文化と言い得るものを探る立場から読み、自らの以後の言語生活の理想を見いだそうとする生徒(読書において)……文章レベル
⑤文章に書かれていることを確かめることとどまらず、それを基に書かれていないことを推理し、発見していこうとする児童(読書において)……語レベル・文レベル・連文レベル	⑤形式段落における要点や意味段落における小見出しなどを、本文の表現に頼らずに探っていくと、説明的文章がまた新たな相貌を帯びてくることに気づく児童(読書において)……形式段落・意味段落レベル	⑤論理に着目して文章全体の要旨やそれを読み手に伝えたいと願う筆者の意図に目を向ける児童(読書において)……文章レベル	⑤説明・論説の読みかたの本は、何と言っても論述にしたがって内容を誤りなくとらえることと悟って、自らの読みが確かな論拠に基づいて進んでいるかどうか確かめて読もうとする生徒(読書において)……語レベル・文レベル・文章レベルまで	⑤表現すること(実際の社会において)を念頭に置いて「広い範囲から情報を集め、目的に合った読み方を心がけ、それらをどのように統合すれば読みたいものになるかを探っていく生徒(読書と読書の統合)……語レベル・文章レベルまで	⑤説明・論説の読みにおいても、論理の筋道を的確にとらえ、筆者も自覚しているとは限らない願いを見抜こうとするからこそ、自ずと個性的な読みがにじみ出てくる生徒(読書において)……語レベル・文章レベルまで

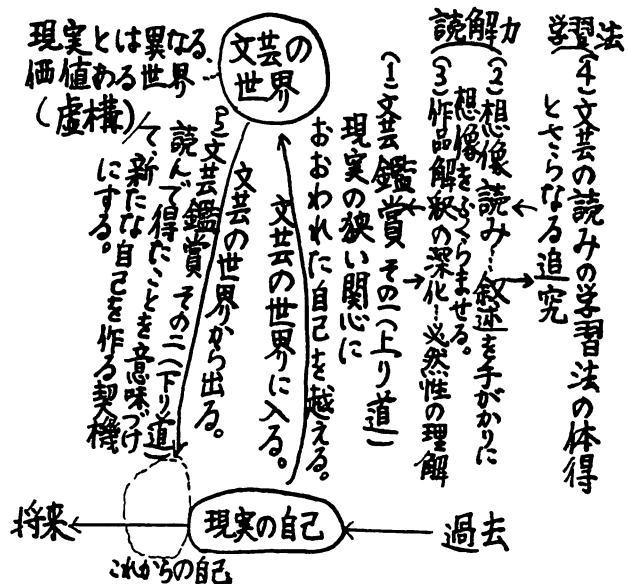
指導すべき内容の具体化			
内容理解深化の系列		読書の系列	
<p>②説明的文章を読んで、おおよそどんなことが書かれていたかを理解し、どんな順序かを手がかりに、少しずつ本文に即して、きちんと細かく読んでいくこととする姿勢を作らせる。</p> <p>そして、本文に書かれている内容と表現とを誤りなところをためにも、本文の確認で終わらせず、書かれていないことを推理することのおもしろさに気づくようにする。(内容イ 時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。)</p>		<p>小学一・二年</p> <p>①読書という広大な海の中に、精読の可能性を秘める島を少しずつ作っていけばよいという心づもりで、現実の自然やできごとに知的好奇心がふくらんでいくような読書紹介を心がけ、児童自らが、語彙の抵抗が大きくないものなら、手に取って読んでみたいと思うようにさせる。(内容ア 易しい読み物に興味を持ち、読むこと。)</p>	
<p>②新たな次元の読みを自覚化させるために、形式段落や意味段落において正しく理解し得ているかどうかを一つに吟味しながらも、そこから見出されることを取り出せるようにする。</p> <p>ただし、目的によって要点も小見出しも変わってくるから、必要な時にこそという箇所に限って考えていかせる。(内容イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を正しく読むこと。)</p>		<p>小学三・四年</p> <p>①狭い範囲にしても、こいうおもしろい自然・人物・時代・社会を書いた本なら読んでみたいという思いを汲んで、読説でかまわないから次々と読んでいかせ、得意と言える領域を作り上げるようにさせる。その上で、今まで関心のなかった領域についても読んでいくという意欲を引き出すようにする。(内容ア いろいろな読み物に興味を持ち、読むこと。)</p>	
<p>②文章を書く要旨やその背後にある筆者の意図を、必要感や目的意識をもつてとらえていくようにすることによって、先の形式段落や意味段落における読みを見直し、また新たな読みの段階に入ったと自覚できるものにする。</p> <p>(内容イ 目的や意図などに応じて、文章の内容を的確におさえるが要旨をとらえること。)</p>		<p>小学五・六年</p> <p>①小学校の上級生としてどんなふうになりたいかを考え始め、求める本を探して、計画的に読む習慣を身に付けて、自らの読書生活を軌道に乗せていく手こたえを得させるようにする。そのために、図書選択のための知識を習得させたり、「本の内容や筆者の意図を簡潔に押さえ、ノートに整理する」などの読書技能を会得させたりする。(内容ア 自分の考えを広げたり深めたりするために必要な図書資料を選んで読むこと。)</p>	
<p>(説明・論説を真新しい気持ちで読むために、(a)重要と見られる語句を文脈のなかで確かにとらえ、(b)論理の展開をふまえた上で、(c)内容を追求し、必要性があれば要約を試みさせ、(d)文章全体の要旨を見いだすようにさせる。(順に、内容ア、ウ、イ、エに対応))</p>		<p>中学一年</p> <p>(読みの自覚化・文章の評価の系列と関連)</p>	
<p>(説明・論説を読むことに熟達していくために、(a)ことばが文脈に及ぼす効果についてすみずみまで考えさせ、(b)書き手に着目して、論理の力動性をとらえさせ、(c)「表現の仕方や文章の特徴」にその個性がどのように表れているかに目が向くようにいさなう。(順に、内容ア、イ、ウに対応))</p>		<p>中学二・三年</p> <p>(同じく、読みの自覚化・文章の評価の系列と結びつく。)</p>	
<p>(書き手が説明・論説に表さざるを得なかった原動力に迫るために、(a)「文脈を考え、語句に着目して」、それぞれの箇所に見られる内容を追求し、(b)「書き手の意図」が、構成や表現の特色にどう反映されているかを探るような態度を育てる。(内容ア 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること。内容イ 文章を読んで構成を確かめたり表現の特色をとらえたりすること。)</p>		<p>国語総合</p> <p>(この段階でも、読みの自覚化・文章の評価の系列と連携させる。)</p>	

指導すべき内容の具体化		
説明・論説の学習法の系列	読みの自覚化・文章の評価の系列	
<p>③生涯、読み深めの手がかりとなる学習法として「概説と視写があること」に気づかせ、こんなふうに学習をしていけば一度読んだだけで読み返す気もしなかった説明的文章も楽しく読めるものだと思う足場を作らせる。(内容エ 語や文としてのまとまりや内容、響きなどを考えながら声に出して読むこと。…基礎となる音読力か?)</p>	<p>③読み手自身がどう考えたかを意識化させ、それに伴って他の学習者がどう受けとめているかにも目を向けさせる。そして、同一の文章を読みながら多様な感想・見解が生じ、それらが違いながらも関連し合っていることに気づくようにさせる。その上で、読み手の感想・見解を肉づけて、そのいずれもがかけがえのないものだと思わせる。(内容エ 読み取った内容について自分の考えをまとめ、一人一人の感じ方について違いのあることに気づくこと。)</p>	小学一・二年
<p>④低学年からの「概説と視写」で中学年から導入する「概説と辞書を引きながら」の読み返しを、学習の目的の教材の性質によって、どのように活用するかについて見通しがつくようになされる。(内容オ 目的に応じて内容を大きくまとめるため、必要なくろは細かい点に注意したりしながら文章を読むこと。)</p>	<p>④多読せざるを得ない場における学習法を新たに身に付け、どんなふうな読み方をすればよいのか、どうまとめればよいのかについて、おおよその手がかりが得られるようにする。(内容オ 必要な情報を得るために効果的な読み方を工夫すること。)</p>	小学三・四年
	<p>④論理の展開に着目して、筆者の書いていることはどういう事象がもとになっているか、そこからいかなる感想・意見をもち出しているか、照応させて考えさせ、責任をもった評価を余々にしていこうとする態度を育てる。(内容エ 書かれてある内容について事象と感想・意見の関係を押さえて、自分の考えを明確にしながら読むこと。)</p>	小学五・六年
<p>③一つの文脈を読んでいては追いつかない場における読み方に習熟し、「書物の表題や目次を読む」必要としている情報があるかどうか判断したり、文章の中の関連する部分に印を付しながら読み進めたり、関連する部分を抜き書きしたりしながら「必要な情報を集める」ようにさせる。(内容カ 様々な種類の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けること。)</p>	<p>②文章の記述に即して書き手の見方・考え方をとおよそ理解することとまらず、自己の現時点の見解と「対比して新たな発見」に進む読み方を心がけ、自己のこの文章の最初の受けとめ方を吟味して広げようようにさせる。(内容オ 文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広げること。)</p>	中学一年
<p>③④どんなふうにとまとめるなど、学習法を駆使し得るという手ぶえをおぼえさせる。(内容オ 目的をもった様々な文章を読み、必要な情報を集めて自分の表現に役立てること。)</p>	<p>②読んだ論説によって意見が変わってしまうという状態を見つ直し、人間、社会、自然などについて自分の目で対象をとらえようとして、自分の意見と言え、自分の意見とどうなる態度を養う。(内容エ 文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見を持つこと。)</p>	中学二・三年
<p>③④自らの学習法の拠点を自覚していくそのうち、自在さと柔軟さを合わせもって学習法をさらに豊かなものにしていく。</p>	<p>②指導に当たっては、読書指導とも関連付け、ことと明記されている。</p>	国語総合

二 文学的文章の読みの指導において

望ましい読み手像は、平成一二年一月二五日の大学院「国語科教育特論Ⅱ」の授業で、井上孝志・小川内智子・安西麻里・上田智津穂の諸君と私の五人で出し合った、「このような児童・生徒が育ってくれば教師としてどれほどうれしいことか。」と思える読み手像を整理して、以下の五点にした。

- (1) 文芸にひたり、文芸の世界の広大さに目を開く人
(文芸鑑賞その一 文芸にひたる系列)
 - (2) 想像をはたらかせて、作品世界の場面・人物像、今後の展開などを思い描くことのできる人(想像読みの系列)
 - (3) 作品の必然性を追求し、作品の根底を流れるものを凝視する人(作品解釈深化の系列)
 - (4) 文芸の味わい方・学び方をつねに求め続ける人(文芸の学習法の系列)
 - (5) 文芸を読んで得た感銘をもとに、その意味を見つめ直し、人生を自ら感動し得るものに高めようと努める人(文芸鑑賞その二 文芸の読みを生かす系列)
- これら括弧に入れた五系列の関係を構造化すると、下の図のようになる。



このような五系列は、下記のように「学習指導要領」の「読むこと」の「内容」を、文学的文章の読みの側からもう一度とらえ直す際にも有用であった。

指導すべき内容の具体化	望ましい文芸の読み手
文芸にひたる系列	
<p>①詩・民話・童話の読み聞かせを通して、作品世界にひたるおもしろさに気づき、自分で求めて読もうとする態度を育てる。(内容ア 易しい読み物に興味を持ち、読むこと。)</p>	<p>小学一・二年</p> <p>④詩や民話・童話を読んで、作中人物とともに喜んで、悲しんだりするのが心から楽しいと思える児童(文芸鑑賞において)⑤少しでも文芸作品を味わい返してみたいという思いが湧く児童(読解力・学習法において)</p>
<p>①現実とは異なる価値ある世界に入り込む楽しさを増すため、読破する冊数をふやし、長編を読んでもめざましい領域に挑み、文芸の世界の広大さを目を開かせる。(内容ア いろいろな読み物に興味を持ち、読むこと。)</p>	<p>小学三・四年</p> <p>④現実を超えた文芸の世界の豊かさに気づいて、それまでに好きになった領域の作品に一層親しむとともに、未知の領域の作品に対しても積極的に関心を持ち、そのおもしろさを理解しようとする児童(文芸鑑賞において)</p>
<p>①求めている作品を見つけ出して、根気よく読み続け、意図的・計画的に自己成長をはかっていく姿勢を明確にさせる。(内容ア 自分の考えを広げたり深めたりするために必要な図書資料を選んで読むこと。)</p>	<p>小学五・六年</p> <p>④文芸作品を読むことで人生や人間に対する見方をつねに真新しくすることができ、このことに気づいて、一層人間的に価値あるものを求め、自分を成長させるために現在の自己にふさわしい作品を見つけ出し、親しんでいくこととする児童(文芸鑑賞において)</p>
<p>①劇的な場面展開ばかりを求めたり、ハッピーエンドばかりを望んだり、早わかりしてしまったりする傾向を見つめ直し、望ましい文芸の味わい方を探そうという態度を養う。</p>	<p>中学一年</p> <p>④すぐには作品世界に入り込めないように思えても、そこにも文芸としての普遍性や人間としてのいいところが見えるに違いないと信じて読んでいく、それまでの読書の枠を拡大しようと努める生徒(文芸鑑賞において)</p>
<p>①現実に拘泥しないだけに、現実以上の生き方が典型的に刻まれているのが文学であるとして、作品世界の内部に分け入り、人間を深くとらえていくこととする意欲を高める。</p>	<p>中学二・三年</p> <p>④演劇や映像など視聴覚に訴えて楽しませてくれるもの以上に、文学のようには読み手が主体的に読もうとしたもののほうが胸に刻みこまれるものと悟って、生活と人生を切り拓くために文学を求めようとする生徒(文芸鑑賞において)</p>
<p>①大作に挑み、人生とともにする喜びを味わうとともに、短編の小さな珠玉の輝きもめづるような文学の愛読者として自己を育てていくこととする態度を確かなものにさせる。</p>	<p>国語総合</p> <p>④文学は人間と人間とを深くところて結びつけてくれるものであり、孤島に一人残されたとしても人間を一人人間らしくしてくれるのだと信じて、自己を育てるために文学を愛読し、自分の一生を念頭に置いて、計画的に読破しようとする生徒(文芸鑑賞において)</p>

指導すべき内容の具体化	
作品解釈の深化の系列	想像読みの系列
<p>③言葉では説明できないにしても作品の流れがおおよそ了解でき、必要ならばあはれしずつ説明もつけられるようにさせる。(内容イ、時間的な順序、事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。)</p>	<p>②おおまかなすじにそって存分に想像をはたらかせて楽しむことから、叙述に即して想像していくことへと進める。その際書かれている叙述自体をふくらませる点的想像の習熟の上に、直前の書き合う叙述とも照応させて思い描く線の想像へと進ませる。(内容ウ、場面の様子などについて、想像を広げながら読むこと。)</p>
<p>③山場、感動的な場面に進んでいかなるを得なかつた必然性もあり込んだ筋を見つけ出すようにさせる。(内容イ、目的に応じて、中心となる語や文をとりえて段落相互の関係を考え、文章を正しく読むこと。)</p>	<p>②点的想像・線の想像の習慣化の上に、焦点となる表現を、すぐ前の叙述だけでなく、関連する前後の叙述とも結びつけて深く理解させる面的想像に重点を置く。他方、本文に基づいて仮設的な場面を想定し、十分に想像を繰り広げていかなる。(内容ウ、場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読むこと。)</p>
<p>③筋の展開(場面構成)を貫く主題の発見に向かい、通読した時には思い及ばなかつたというところがでてくるかを探し出そうとする態度を養う。(内容イ、目的や意図などに応じて、文章の内容を的確に押さえるながら要旨をとらえること。)</p>	<p>②叙述の作品に占める重要性に応じていくつも面的想像の可能性を探っていき、登場人物の心情に迫り、描写を味わいながら、その作品・文体を通してしか生み出せない人物像をとらえさせる。(内容ウ、登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読むこと。)</p>
<p>③作品の語り手に着目して、このような場面構成・筋にせざるを得なかつたもの、主題を考え合い、文芸作品の主題の包容性を悟らせる。(内容ウ、文章の展開を確かめながら主題を考えたり要旨をとらえたりすること。)</p>	<p>②文芸作品中で主要語句が用いられる場面をありありと思い浮かべたり、登場人物の心情を切実に感じ取ったりしながら、手がかりとなることばの重要性をひしひしと感じさせる。(内容ア、文脈の中における語句の意味を正確にとらえ、理解すること。)</p>
<p>③同一作者の一連の作品や対照的な作品群などと読み比べて、対象とする作品の主題に対する解釈を深めるとともに、作者をつき動かすものについても思いをはせるようにいざなう。その際、文体や文章の特徴に留意して、内容主題に陥らないように努めさせる。(内容ウ、表現の仕方や文章の特徴に注意して読むこと。)</p>	<p>②本文の叙述をふまえたがらもそこから当然予想される場における人物同士のかかわり合いや内面の独白などを描き出し、読みとってはじめて意図が許され、どこからは意図的な想像に堕してしまいかについて見通しを持つことができるようにさせる。(内容ア、文脈の中における語句の効果的な使い方について理解し、自分の言葉の使い方に役立てること。)</p>
<p>③作品の特質に応じて、ここでは何を中心に読み深めていけばよいかという展望がおよそ得られ、それを念頭に置いて読んでいくと読みの手応えが確かにあつたという経験を重ねていくようにさせる。(内容イ、文章を読んで、構成を確かめたりすること。)</p>	<p>②劇化・脚本・シナリオ・放送劇台本・スライドの作成、視点を交えて登場人物の内面をほり下げるミニ創作など、作品と興味に合う表現を試みるなかで想像しながら読む力を最大限に発揮させる。古典における想像読みの機会もおりおりに得させて、作品を命の通ったものにさせるようにする。(内容ウ、文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。)</p>

指導すべき内容の具体化	
読みを生かす系列	文芸の学習法の系列
	<p>④作品本文の語句・文としてのまとまりをとらえて音声化し得る音読力の育成から、それを活用して、何度も繰り返して読むことの爽り多さに気づき、慣れるとともに、ゆるやかにかみしめるように読むことを心がけさせる。</p> <p>他方、課題を解く手がかりとして、場面を限った視写を試み、音読（緩読）では行き届かないことが見えてくることに気づかせる。（内容エ 語や文としてのまとまりや内容、響きなどについて考えながら声に出して読むこと。）</p>
<p>⑤低学年から味わってきた心底からいいなあ、痛快だったなあと思える感動体験を徐々に目覚化し、異なった感想を聞いて自らの思いを見つめ直すようにさせる。（内容エ 読み取った内容の違いについて自分の考えをまとめ、一人一人の感じ方について違いのあることに気づくこと。）</p>	<p>④音読による反復熟読と、その補いとしての緩読と、課題と場面とを明確にした視写に習熟させるとともに、熟読による読むことへの集中と辞書を引さながらじっくり読み返すこと、愛読することも、有力な学習法であると感じくようにさせる。（内容オ 目的に応じて内容を大きくまとめたとき、必要なところは細かい点に注意したりしながら読むこと。）</p>
<p>⑤めいめいの作品との出会いに応じた感想の生かし方を見いだそうとする態度を育てる。（内容エ 書かれている内容について事象と感想、意見の関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読むこと。）</p>	<p>④これまでの音読（反復熟読・緩読）、視写、熟読、愛読、辞書を引きながらの調べ読みなどにとどまらず、文芸作品のどこに着目して読み深めればよいかという着眼点を理解して、一編に取り組む時の見通しをつけるとともに、比べ読みなどいくつかの作品を関連づける学習法についても目を開かせる。（内容オ 必要な情報を得るために、効果的な読み方を工夫すること。）</p>
<p>⑤語り手の述懐や登場人物の言動・生き方の中に、自らの生き方に示唆や励ましを得るもの、否定的にはたらかしかけて現在のあり方を見直させるものを見いだし、青年期の自己をどう作り上げていくかという課題に正面から立ち向かうようにさせる。（内容オ 文章に表れているものの見方や考え方を理解し、自分のものの見方や考え方を広くすること。）</p>	<p>④文学の読みにおいても多読が不可欠になることを念頭に置いて、表題・目次・解説からまず読みたいところを探し出した後、とばし読み・抜き読みをしつつもこれぞという場面を見つけたら、その獲得・定着に力を注ぎ、種々の文章から必要な情報を集めるための読み方を身に付けさせること。）</p>
<p>⑤作品が全体として投げかけているものや少しふれられているだけであったも胸にとびこんでできた問題を、自らの内で問い返し、他の作品を求めて読むんだり、他の人の考えを導いたりして醸成させて、どう意味づけしていくかを探っていく態度を養う。ひとたびこうだと思えたことでも、いつでも感じ直す余地を残して、現時点ではこのようにしか位置づけられないということなのだと思わせ、文章を読んで人間、社会、自然などについて考え、自分の意見をもつこと。）</p>	<p>④精読のための学習法、多読（情報活用）のための学習法を駆使して、自ら見つけた出した課題・疑問（多くは生き方とかかわる）をつきつめ、掘り下げる契機を得させる。（内容オ 目的をもって様々な文章を読み、必要な情報を集めて自分の表現に役立てること。）</p>
<p>⑤文学を読んだ目で現実を眺めるとともに、文学に結晶した登場人物の生き方に対し、自らはどのような生き方を作り上げられるかに思いを及ぼし、世のためになり、しかも自分でも満足し得る人生を創出することこそ人生の一大事業であることと理解させ、それに努めようとする意欲に火をつける。（内容エ 様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること。）</p>	<p>④文学の学習法を披瀝し合せて、自己のなかでどのような学習法がどの程度定着しているかを見つめ直し、新たな学習法としてさらに取り込めるものを探索していくことと、思いを燃え立たせるようにする。</p>

おわりに

以上は、新「学習指導要領」の『解説』を小・中・高校を通して読みながら、望ましい読み手を育てるために指導をどう一貫させていけばよいかを探っていたもので、全く一家言に過ぎない。小・中・高校の現場の先生方から意見がたまわって、少しでも妥当性のあるものにしていきたい。その上で、もしこのような組織化が可能であるなら、どのように肉づけし得るかを探っていくようにしたい。

〈注〉

- (1) 芦田恵之助稿「綴方教授の研究」、『教育研究』第五九号、初等教育研究会編、大日本図書刊、明治四二年へ一九〇九年二月一日発行、二六〇三ページ

- (2) 拙稿「文芸教育基礎論の研究——文芸の価値と役割に関する基本的考察——」『昭和五一年度教育学研究科修士論文抄』広島大学大学院教育学研究科、昭和五二年へ一九七七年七月三〇日発行、四八～五〇ページの考察に今回手を加えて作成したものである。

- (3) 文部省『小学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版刊、平成一年（一九九九年）五月三十一日発行、全一八八ページ

文部省『中学校学習指導要領（平成10年12月）解説——国語編——』東京書籍刊、平成二一年（一九九九年）九月六日発行、全一五九ページ

文部省『高等学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版刊、平成二一年（一九九九年）二月二十八日発行、全一六七ページ

（まえだ しんしょう・本学教授）